サウスポー

人間科学部
人間科学科３年
榎本　航太

一

「球が投げられない投手は、羽のない鳥と同じだ」

最高気温を更新した八月十二日、噎せ返るくらい暑い部室に僕を呼び出した野球部顧問の滝内は、包帯でぐるぐる巻きの僕の右腕を見ながらそう言った。

上腕骨骨幹部螺旋骨折。茹だるように熱い八月のマウンドで、高校一年の僕の右腕は折れた。隣町の木更津市にある私立の強豪校に野球部の特待生として入学した僕は、高校一年の四月から試合に出た。「君はいい投手だ。高校でも通用する」中学校の応接室で、当時中学三年だった僕に滝内はそういった。親と相談して、僕は高校三年間を野球に捧げることを心に決めていた。でも、僕の右腕は折れた。

野球をするために高校に行っている人間から野球を奪うと、一体どうなるのか、僕は分かった。部室の横にある葉桜になったソメイヨシノにしがみついているあの蝉の抜け殻は、今にも風でどこかに飛んで行ってしまいそうだ。

「野球ができない高校球児は、抜け殻と同じだ」

荷物をまとめて、部室を出た。つぶやいたのは滝内じゃない。僕だ。

二

「今日サボろうかな」と毎朝胸の中でつぶやくのは、君津駅のホームで電車を待っている間の僕の日課になってしまった。ギプスが外されたばかりの右腕はなぜか重く感じる。朝のホームに差し込む太陽の光は弱く、十二月の冷たく乾いた風が肌を撫でていった。

千葉県内を走るＪＲ内房線は、東京湾に沿うように路線が敷かれ、容赦なく吹き付ける潮風と畑から舞い上がる砂埃のせいで、車体にプリントされた青と黄色の二本のラインはいつも汚れている。潮風に煽られるたび車体は揺れ、パンタグラフは軋み、車輪は怒鳴った。赤黒く錆びたレールと汚れた枕木の上を走り、高校がある木更津駅まで僕を運ぶ。四か月前とは、朝起きる時間も、電車に乗る時間も、学校に行く目的も違う。

「今日サボろうかな」

二回目は、声に出してつぶやいてみた。

定刻通りに来た内房線の車内は暑苦しい。曇った窓ガラスに朝日が反射していた。座席の所々は学生とサラリーマンで埋まっていたが、隅が空いていて何とか座ることができた。扉が閉まってゆっくりと車体が動き出すと、隣に座っていた女子高生の制服から漏れてくる香水のにおいが鼻を刺した。その柑橘のにおいはどこか人工的な感じがして少し気分が悪くなった。僕と同じ高校のブレザーを着た彼女は、リュックを両手で抱えて蹲るように眠っていて、肩まで伸びた茶色い髪は傷み、毛先は色が抜けている。ぬいぐるみのストラップや缶バッジが沢山ついたピンクのエナメルのリュックには光沢があり、彼女の細い指の爪に重く塗ら

れたマニキュアのピンクとは少し違う。両耳にはめられたイヤホンのピンクは、リュックやマニキュアのそれよりも比較的薄かった。彼女の体にちりばめられたそれぞれのピンクの若干の彩度の誤差は美しく、時に不快で、柑橘の匂いが漂うその空間はどこか非現実的な感じがした。

木更津駅に着くと、彼女は目を覚まして立ち上がり、電車を降りた。僕も続くように降りて、ホームの階段を上るピンクを目で追った。三台しかない自動改札機に差し掛かると、ピピッという小高い電子音とともに流れるように改札を抜けていった。彼女が手に持っている革のパスケースは、彩度の高いアクリル絵の具のような青だった。

「それはピンクじゃないのかよ」

前を歩いていた二人組の女子高生が驚いた顔で振り返り、不思議そうに僕を見つめた。思ったより大きな声が出てしまったことを反省し、標準語のツッコミの切れ味の悪さに辟易し、においのない乾燥した冷たい空気を思いっきり鼻から吸い込んだ。

〝ピンクレディー〟は改札を抜けると、高校がある方角とは別の出口に向かって歩き出した。いいコードネームを発見したと思った。高校に行く理由も目的もない僕はピンクレディーの跡を追うことにした。どうせ高校に行っても授業は寝てるだけだし、野球はできない。ピンクレディーもきっと僕と同じような理由でサボっているに違いないと思った。

木更津駅西口の階段を下って外に出ると、高校や短大、コンビニやチェーン店の居酒屋でそれなりに賑わっている東口とは打って変わって静かで、駅前の商店街はシャッターが閉まった店がたくさんあり、「商店街」という言葉の定義に反している。ピンクレディーはその商店街を足早に抜けて、交差点を左に曲がった。ピンクのリュックを見失わないようにある程度距離を取って歩いていた僕は、小走りで彼女と同じ道をたどり交差点を曲がると狭い車道に出た。所々歩道側に凹んでいるガードレールにはスプレーで英単語が書かれているが読めない。その単語が読めないのは僕の低い学力のせいではなく芸術的な書体とスペルミスのせいだ。

ガードレールの落書きに気を取られていたせいか、ピンクレディーとの距離をかなり詰めてしまった。僕は怪しまれないように歩いて彼女を通り越してシャッターが閉まったパチンコ屋の前にある自動販売機で冷たい缶コーヒーを買った。パチンコ屋の前にはペットボトルやコンビニの弁当の容器にまじってジャンプが捨ててあった。マンガには詳しくないけど、表紙を飾っている麦わら帽子をかぶったゴム人間の名前くらいは知っている。

ピンクレディーという名の尾行対象を見失わないように横目で確認しながら缶コーヒーのふたを開けて一口飲むと、ピンクレディーがこちらに歩いてきている気がした。僕はなるべく彼女の方を見ないように気を付けていたが、彼女が明らかに僕にむかって近づいてきているのが分かった。アスファルトを蹴る足音はどんどんこちらへ向かっている。自然を装ってまたコーヒーを口に含むが味がしない。鼓動が激しくなる。僕の数センチ後ろで足音が止まった。柑橘のにおいがした。視界の端にピンクが見えた。僕はほぼ確定した最悪の結末をこの目で見るために恐る恐るゆっくりと振り返った。

「ウチの高校だよね。サボり？それともストーカー？」

長い睫毛はきれいに反り返っていて、その茶色い瞳の先には僕の黒い瞳があった。

「あ、えーっと」

強い風が吹いた。さっき駅で吸い込んだ冷たい空気とは違うにおいがした。その風は温くて、僕の額の汗を乾かしてくれない。

「ぜ、前者です」

そうだ。僕はストーカーじゃない。僕は、今朝の電車で見かけたピンク色のあなたのことが気に

なって学校をサボり駅から尾行してきた前髪の長い高校球児だ。

三

だったら一緒にサボろーよ。と言われたことに対して驚いている暇もないうちに、迷路のような狭い路地に入り小さなコインパーキングを抜けて暗い階段を上って静かな建物の二階についた。重そうな木の扉にぶら下げられた薄いアルミのプレートには「メイズ」と書かれている。もし英単語の「MAZE」の意味ならば迷路のような立地条件を的確にとらえた妥当性のある店名だと思った。

「ここ。入ろ」

ピンクレディーが扉を引くと、カランコロンカラン、という音と一緒にコーヒーのにおいがした。ここが喫茶店であるとわかった時、出会ったばかりのJKと、もしかしたらこのままアダルトな展開になってしまうのではないかと妄想を膨らませていた十六歳の自分の馬鹿さ加減を責めずにはいられなかった。

店内は小ぢんまりとしていたが高級感があった。窓に沿うようにテーブル席が四つあって、壁側にあるカウンターには新聞を広げた中年の男性と、ジャージ姿の若い男性が席を二つ空けて座っていたが、彼らはこの店の雰囲気にはそぐわない気がした。

僕とピンクレディーは、一番奥のテーブル席に向かい合って座った。「何か飲もー」というと彼女はすぐにマスターを呼んでカモミールティーを注文した。

「喫茶店に缶コーヒー持ってきたお客さんは君が初めてだよ」

マスターと呼ぶには若い気がする二十代後半くらいの男の人は、テーブルの上に置いてあった僕の飲みかけの缶コーヒーを見て笑いながら言った。飲み干す前に尾行がバレてしまったんですよ。とは言うべきではないなと思いながら、すみません。と一言謝った。

「じゃあ僕はホットのコーヒーで」

「コーヒー持ってきたのにここでもコーヒー飲むの？ウケる」

ピンクレディーの的を射た指摘はマスターも同感のようで笑いながら何度も頷いていた。

「わかった。ホットコーヒーね。今ちょうど豆を挽いてるんだ。すこし時間かかるよ」

「あ、大丈夫です。これ飲んで待ってます」

テーブルの上の缶コーヒーを一口飲んだ。冷え切った苦い水が、渇いた喉にしみた。

「野球部なんだね」

「どうして知ってるんですか」

「そのカバン、ウチの高校の野球部のやつじゃん」

「ああ。そうですね」

「ハギノくんって言うの？」

「いや、よく間違えられるんですけど荻野（おぎの）です。どうして僕の名前知ってるんですか」

「カバンに書いてあるから」

「ああ。そうですね」

「ラブホにでも行くと思った？」

マスターがカモミールティーを持ってきてテーブルの上に置いた。マスター、どうか大人の立場から「今の会話の流れはおかしいよ」と言ってやってください。

「そんなわけないじゃないですか」

「ウケる。そうだね」といってカモミールティーを啜った。

「てかさっきからなんで敬語なの？」

「いや、なんとなく年上だと思ったので。二年生ですよね？」

「三年だよ」と返ってくるスピードが速すぎて「三年生が受験シーズンになに朝からお茶してるんですか」と返すタイミングを失った。

「ハギノくん一年生だったんだね。ハギノくん下の名前は？」

「荻野（おぎの）です。荻野佑樹。ハギノじゃないです。あと僕も先輩の名前まだ知らないです」そうだ。いつま

でもピンクレディーとは呼んでいられない。
「蒼衣。佐野蒼衣」
挽き立ての豆で淹れたコーヒーが僕の前に置かれた。窓の外は風が吹いていた。
「全身ピンクなのに、名前はアオイなんですね」
「え、なにそれ。寒い」
蒼衣さんはカモミールティーを口に含んだ。運ばれてきたホットコーヒーはまだ熱くて飲めない。僕は缶コーヒーを手にとって、残りを一気に飲み干した。缶の表面にびっしりと付いた水滴を、一つずつ指で払い落とした。

四

カモミールティーを飲み干した蒼衣さんは、コーヒーゼリーを注文した。
「ハギノくんって野球部なのにどうして髪長いの？」
どうやら蒼衣さんの前では僕は「ハギノ」として生きるしかないみたいだ。
「まあ、今は幽霊部員ってやつです。夏にケガしちゃって。螺旋骨折っていうけっこうエグめの骨折で、もうこの肩と肘は使い物にならないんです」
「じゃあもう野球はしないの？」
「はい。まあ、しないというか、できないんですけどね」
マスターが運んできたコーヒーゼリーは透明の器にのっていて、肌理の細かい生クリームが添えられていた。蒼衣さんは左手に持ったスプーンで生クリームだけを食べた。
「蒼衣さんって左利きなんですね」
「そうだよ。私もハギノくんと同じで小学校から野球やってたの。中学でやめたけど」
「そうなんですか。なんでやめたんですか？ケガでもしたんですか？」
「ううん。少年野球チームに入って、男の子の中に混じってやってたんだけど、左利きってだけでピッチャーやらされてた。でもやってみたら意外と簡単にできちゃって、最初の方はたのしかったけど、私の投げるボール誰も打てなくなっちゃって。つまんなくなってやめた。中学はソフト部に入ったんだけど、私だけ飛び抜けて上手くて。つまんないし、なんか嫌で辞めた。これ自分で言うのも変だよね」
蒼衣さんは笑っていた。蒼衣さんの微かな笑顔は、今の僕にとっては綺麗すぎて、同時に残酷だった。僕が「羽がないせいで飛びたくても飛べない鳥」なら蒼衣さんは「羽が大きすぎるせいで他の鳥よりも高く飛べてしまい、それに嫌気がさして飛ぶことをやめた鳥」だ。僕が抱いた劣等感は「蒼衣さんが羨ましいです」という言葉になっていた。
「え？何が？」
「僕は野球ができなくなったから辞めたんです。蒼衣さんみたいな贅沢な辞め方しないです」
「ハギノくんだってリハビリとかすればそのうち治るんじゃないの？」
「治らないんです」
店の中に僕の声だけが響いた。カウンターにいた男性が二人とも僕の方を振り返っていて、蒼衣さんの口はポカンと空いたままだった。
「デカい声出してすいませんでした」
「ごめん。気に障った？」
「リハビリして、またボールが投げられるようになったとしても、前と同じようなボールは投げられないんです。一度骨折したところは再発する可能性が高いから、しばらく野球は控えた方がいいって医者は言ってました。全力でボールを投げたら、また投げられなくなるかもしれないんです。怖いんです。だったらもう一生投げたくない」
「超カッコ悪いね」
蒼衣さんは左手に持ったスプーンで残りのコーヒーゼリーをすくって食べ終え、僕のホットコーヒーを一気に飲み干した。僕は何が起こっているか分からなかった。
「ハギノくんさっきからカッコ悪いわ。ただ怖がってるだけじゃん。また野球やりたいと思ってるから

まだその野球部のカバン使ってるんじゃないの？私はアンタと違うの。自分が得意なことで人に迷惑かけるのが嫌だっただけ。アンタも自分がすごい球投げるせいで人に迷惑かけるくらいになってみなよ。ウジウジ悩むならそれからにしろってハナシ」

蒼衣さんはトレードマークのピンクのリュックを持たずに席を立って、大きな足音を立てて店の扉に向かっていった。

「私が戻ってくるまでここにいて。マスター、ハギノくんのこと見張っといて」

蒼衣さんはそのまま店を出ていった。慌ただしく階段を駆け下りる音が店の中まで響いてきた。僕は蒼衣さんの言葉に貫かれたまま、しばらく何も考えることができなかった。それに、僕のホットコーヒーは一瞬のうちに飲まれて無くなってしまった。

「マスター、アイスコーヒーください」

「わかった。あ、帰っちゃダメだからね。ハギノくん」

「帰りませんよ。まだこの店に来てから何も飲んでませんから」と言ってから、テーブルの上に置いてあるコーヒーの空き缶に気づいて、急いでバッグの中に隠した。なぜか火照っている自分の体温と、背中を伝う汗が不快で、制服のカーディガンを脱いだ。

五

壁に掛けられた鳩時計の太い針がちょうど午前十時を指した。テーブル席で三杯目のアイスコーヒーを飲んでいる僕の目の前に立っているのは紛れもなく蒼衣さんだ。額に汗を滲ませ、息を切らした蒼衣さんは、左手に掴んでいたナイロン製の袋をテーブルの上に叩きつけた。その振動でコーヒーの中の氷がカランと鳴った。

「ハギノくんの言い訳は分かった。ケガした右腕でボール投げるのが怖いんでしょ」

「ザックリ言うとそういうことです」そういうわけで学校に行っても何もすることがないからこうやって平日の朝から蒼衣さんとお茶してるんです。と続ける勇気は僕にはない。

「右腕使えなくなったくらいで人生終わったみたいな顔しないで。私はハギノくんにまた野球やってほしい。これあげるから使って。わざわざ家まで取りにいったの」

蒼衣さんが指さしたのは、さっき蒼衣さんがテーブルに叩きつけたナイロン製の袋だった。ミズノのマークが刺繍されているその袋を手に取ると、思っていたよりも軽かった。この袋の中身が何であるのか想像するのはあまりにも簡単で、袋の色がピンクがったことが何よりも不安だった。

「これ僕がもらっちゃっていいんですか？」

「うん。あげる。中学のとき私が使ってたやつ。あんまり使ってないから汚れてないよ」

「いや、別にそういうのは気にしてないんですけど」

「じゃあ何？」

「さっきから言ってますけど僕右利きなんで、多分これもらっても使えないと思います」

「ハギノくん、右腕が使えないから困ってるんでしょ？」

蒼衣さんの言っていることが理解できない。いや、厳密に言えばこの人が僕に何をさせようとしているのか、間接的に僕の脳は徐々に理解し始めていたのかもしれない。何度振り払っても、蒼衣さんの言葉は僕の背中を押し続けた。

「何のために腕がもう一本あるのよ」

氷が溶けきってしまった五杯目のアイスコーヒーを飲み干した。窓から入ってくる湿った夜風は、海の温度を運んで来る。体が少しずつ冷えてくるのを感じて、ゆっくりと窓を閉めてからくしゃくしゃに丸めて置いてあった学校指定の紺色のカーディガンに再び袖を通した。カーディガンの左胸にある銀色の糸で刺繍された校章が少し解（ほつ）れていた。指で糸をつまんで引きちぎると、羽を広げた鳥をモチーフにしたごくありふれた校章は少し歪んでしまった。しかし歪んだことによって鳥になんとなく躍動感が

出て、僕は少し気に入った。もはやただの糸屑になってしまったかつての銀の鳥の一部を、空のグラスの中に入れて席を立つと、店の中にはもう僕しかいないことに気づいた。僕が窓を開けていたせいで店内には冷たい空気が充ちていて、マスターはエプロンの上からユニクロの薄いダウンジャケットを羽織っていた。蒼衣さんが帰った後も、僕はずっとこの店にいた。

「マスター、そろそろ帰ります。長居してすいませんでした。コーヒー美味しかったです」

「どうもね。またいつでもおいでよ。ハギノくん」

僕がひたすら飲み続けたコーヒー代に加えて、蒼衣さんの分まで支払うと、財布から野口英世が二人いなくなった。エナメルバッグを右肩に背負って店を出ると、外は思ったより冷え込んでいて、夜空に張り付いたオリオン座には薄い雲がかかっていた。土と汗のにおいがするバッグから白と黒の千鳥格子柄のマフラーを取り出して適当に首に巻き、風が吹いてくる方に向かって歩いた。僕の体からは、なぜか柑橘のにおいがした。

店を出てから数分歩くと、木更津港についた。並ぶように泊まっているたくさんの小さな漁船をまだら模様に照らしているのは釣り人たちのヘッドライトだった。海水で濡れたアスファルトには切れた釣り糸やコンビニのビニール袋、乾いたヒトデが落ちていた。僕はそれらを一つずつ大股でまたいで、海だけを見渡せる場所を探した。

東京湾から吹き寄せる潮風は人工的なにおいがした。そのにおいは質の悪い香水と同じで、いつまでも肌にまとわりついた。東京湾を挟んで遠くの対岸に見える横浜の街は半永久的に煌々と光を放って、まるで横に伸びる一本の線のように見える。その線状のまぶしい光は、グレーに濁った海面に反射して、水平線を金色に縁取っていた。

コンクリートの上にバッグを置いて、蒼衣さんからもらった袋を開けた。中に入っていたのは、Aoiという刺繍が入ったグローブだった。それは夜でもはっきりと分かるほど自己主張の強い青で、右手に付けると僕には小さく感じた。

バッグからコーヒーの空き缶を左手で取り出した。両足を揃えてから右足を一歩引いて、大きく振りかぶる。海から風が吹く。深呼吸をする。体の中に吸い込まれた温い空気は白い息になって、宙に舞いあがってすぐほどけた。右足を高く上げて、左腕を思いっきり振った。左手から放たれた空き缶は、ぎこちない放物線を描いて海に浮かんだ。きらきら光る海面を、ほんの少し間だけ揺らしていた。

六

「大学生って暇なんですか」

「こんな暑い中せっかく応援に来てあげたのに何その言い方」

「派手な格好したどっかの誰かさんがバックネット裏に座ってたんでマウンドで集中できなかったですよ」

「だってあそこが一番ハギノくんのことよく見れるんだもん」

「僕からもよく見えましたよ」

「あのね、私の後ろに座ってたオジさん、多分どっかの大学のスカウトだと思うよ。ハギノくんのことずっとビデオで撮ってたから、思いっきり邪魔してやった」

「僕の出世のチャンス潰す気ですか」

蒼衣さんは二つに割ったパピコをひとりで食べている。真っ青の半袖のアンダーシャツは僕の練習着で、蒼衣さんが着ているとかなり大きく見える。折り返したピンクのハーフパンツの裾から伸びる蒼衣さんの脚をバレないようにかなりの頻度で見ることに成功した。

「ハギノくん大学どうするの？」

「蒼衣さんとこの大学なら受験勉強しなくても入れそうなんで、来年からはまたお世話になると思いま

す」
「うっざ。嫌な後輩持っちゃったなー。元々私のストーカーのくせに」
「あのとき僕がオゴったんだからせめてその言い方はやめてくださいよ」
　僕も蒼衣さんはしばらく黙って歩いた。左肩のアイシングはまだ冷たい。
「今日はおつかれさま。ナイスピッチングだったよ」
「蒼衣さんが褒めてくれるなんて珍しいですね」
　照れくさそうに笑った蒼衣さんは、溶けたパピコを少しだけ吸った。
「大学でも野球続けるよね？」
「はい。でも大学でこのグローブ使うの恥ずかしいんで、入学祝いにグローブ買ってほしいんですけど」
「いいよ。分かった。何色がいい？」
「ピンク以外で」

コメント

　ストーリーの舞台となった千葉県木更津市は、僕が生まれ育った港町です。僕は幼稚園から高校までずっと木更津市内の学校に通っていたので、神奈川大学へ進学することは、僕にとって大きな冒険でした。ストーリーの中で主人公の荻野佑樹が、もう一度野球をするため、左投げに挑戦する決意をし、東京湾へ向かって空き缶を投げるシーンがありますが、ここで出てくる東京湾の描写は、今回の作品の中でも特にこだわって何度も書き直した箇所です。高校三年生の時、第一志望の大学の受験に失敗して、浪人するか、神奈川大学へ進学するか悩んでいた僕の背中を押してくれたのが、木更津から見えた横浜の光だったからです。
　生まれて初めて書いた小説です（小説と呼ぶのもおこがましいですが）。精一杯努力したつもりですが、素人の限界は知れています。
　主人公の荻野佑樹は、僕の分身です。この作品を通して、当時の僕の苦悩や葛藤、また僕が佑樹に託した願いが少しでもご理解いただけたなら、とても幸せです。